

財団だより

# 多摩川

2001.3 第89号



多摩川中流域の雑魚鮒  
立川市教育委員会蔵



多摩川河口（多摩川を歩く・2000.11.25）

## 多摩川現風景

### (45) 多摩川を歩き、語る

多摩川流域協議会が行う多摩川シンポジウムの恒例の「多摩川を歩く」シリーズも、二ヶ領用水（平成10年12月12日）、六郷用水（平成11年2月27日）、玉川上水（平成11年11月13日）と続き、今回は「河口編」を11月25日に行うこととなった。

参加者は京急大師線の終点、小島新田駅近くの児童公園に9時半に集合し、多摩川右岸を「多摩川河口水準抛票」に向けて歩いた。参加者は80名、スタッフも20名以上で総員100名を越す大人数であった。

「多摩川河口水準抛票」から一行は右岸を上流に向けて歩き始める。右手には河川環境管理計画の中で「生態系保持空間」とされる地域がある。葦原がひろがり、干潟に鳥が遊んでいる。首都高速横羽線、大師橋を望む地点で、堤を降りて旧稲荷新田の村社である水神社に参拝する。近くの殿町小学校の海苔養殖関係の資料室、郷土資料室を見学する。

ワイルドフラワーの植栽地も季節はずれて見るものも無い。六郷水門、河港水門を過ぎ、六郷橋を右手に見て、国道15号線（旧東海道）を越し、京急本線をくぐり抜けると、ディスカッションの会場、川崎市産業振興会館につく。会場では、「多摩川21世紀への

贈り物」をテーマに市民、行政が盛んに意見の交換をおこなった。

川沿いを歩くことも楽しいものであるが、今回の行事のように、川と地域の関わり合いを知り、語り合うことはたいへん意味のあることと思われる。このような試みを、これからも続けてゆきたいものである。

### 関連する財団の研究助成

#### < 学術研究 >

川崎・多摩川エコミュージアム構想をモデルとした市民・行政・企業・専門家におけるパートナーシップ型地域づくりに関する調査研究

1999年 進士五十八 東京農業大学 (No.202)

世田谷・多摩川における市民ボランティア、学生、行政のパートナーシップ型の河川舟運振興策と癒しの川づくりのための実践的な調査研究

長野正孝 武蔵工業大学 研究中

#### < 一般研究 >

多摩川流域及び多摩地域が抱える、自然環境保全（河川、水路、丘陵等）の課題と住民活動の実態調査

1999年 榎本正邦 せたがや村ネットYUI (No.114)

多摩川をモデルとした「河川環境」の保全に関する住民参加型の手法、制度についての調査 研究

2000年 山道省三 多摩川センター (No.119)

## 多摩川散歩

玉川上水周辺で太宰治など作家の足跡をしのぶ「三鷹文学散歩マップ」

三鷹市教育委員会

三鷹市内の玉川上水周辺には、戦前から多くの著名作家が暮らしていました。また、このあたりは、数多くの文学作品に繰り返し登場しています。

近年、身近な地域の歴史や文化への関心の高まりの中で、文学についても、作品に登場した場所や作家のゆかりの場所を実際に訪ねることにより、作品や作家への理解を深めること、いわゆる文学散歩が、広く認知され行われるようになりました。

そこで、三鷹市教育委員会では、そのような市民の文学散歩へのニーズを受けて、昨年3月に「三鷹文学散歩マップ」を作成しました。

このマップは、B3版オールカラーで、「作家の旧居跡」「太宰治ゆかりの地」「作品等に登場する場所」「作家の墓」および「文学碑等」の5分野で構成され、それぞれ色分けしてイラストマップに表示するとともに、1件づつ解説文をマップの左右に掲載しています。「作家の旧居跡」では、山本有三や三木露風、武者小路実篤など8人の作

家の旧居の場所を表示しています。また、「作品等に登場する場所」では、井の頭公園や玉川上水、三鷹駅など8つの場所について、その歴史的な経緯と登場する文学作品名を掲載しています。掲載している作品には、近年の話題作も含まれています。

このマップを手にして、三鷹の街を歩いて見ませんか。きっと新しい発見があると思います。ところで、市民のボランティアにより「みたか観光ガイド協会」が一昨年発足しました。ガイド協会では、3月から11月まで、毎月第4日曜日に「太宰治の足跡案内」を自由参加で実施しています。(午前10時J R三鷹駅南口デッキ集合)参加者には、「三鷹文学散歩マップ」を渡しています。太宰に関心のある方は、一度参加してみたいはいかがでしょうか。

このマップは無料です。三鷹市山本有三記念館や三鷹駅・三鷹台の各市政窓口や三鷹市内の図書館などにありますが、郵送をご希望の方は、下記までお問い合わせください。

問い合わせ先

三鷹市教育委員会生涯学習推進室

0422 - 45 - 1151(内線3313)



イラストマップ「三鷹文学散歩マップ」

## 私と多摩川

多摩川を撮り続けて30余年



二〇〇〇年の夜明け（多摩川河口にて、原画はカラー）

府中在住 品田健一

多摩川河口の夜明けは素晴らしい（写真1）

特に寒い冬の早朝、茜色<sup>あかね</sup>の空の下、羽田側の堤防に立って日の出を待ちます。やがて房総の低い山並みに真っ赤な太陽が顔を出し、河口のほぼ中央に黄金色の光芒<sup>こうぼん</sup>が伸びてきます。ジャンボ機が飛びかき舞い、漁船が玉虫色の波をたてながら河口へ急ぎます。こんな情景にひかれて何度も羽田へ通っています。

日の入りは奥多摩湖です。残照の湖面に浮かぶドラム缶橋を家路に就く釣人を小さく入れた夕暮れの風景が何とも言えません。

そのほか丹波<sup>たば</sup>溪谷の秋、惣岳<sup>そうがく</sup>溪谷、雨の御岳溪谷、カヌー練習、羽村堰<sup>せき</sup>そして御輿の渡御、川原の荻、稻城大橋、新しい大師橋、河口の船溜りとかもめの乱舞など枚挙にいとまがありません。

さて、私と多摩川との出会いは、昔勤めていた工場からシアン<sup>シアン</sup>の混じった廃水が多摩川に流れていたことです。廃水設備を改善し、水質テストを繰り返し、都の水道局にOKを貰うのに苦労しました。高度成長期で、みんなが夢中になって働いていた35年も昔のことです。

その頃から多摩川がどんなに汚れているのかと

源流から河口までのあちこちを歩きました。中流・下流の淀み<sup>よど</sup>はごみだらけで、どこの堰も泡、泡、泡でした。その後さまざまな規制や住民参加の運動などによって、川がきれいになってきたように見えますが、まだまだです。

この30余年間に感じたり、心配なことは、両岸に大きなマンションが増えたこと、セメントの堤防や波よけブロックが増えたこと、架け替えられた橋、新しい橋も増えたけれども、橋の周辺や堤防には車がいっぱいなこと、川原でのバーベキューが急増していること、水源地域にもどんどん車が入り込んでいることなどです。

人々が多摩川に集い楽しむには、相応の制約や一人一人の意識改革が必要だと思います。

多摩川の清掃に参加したり、生活廃水を極力きれいにするなどして、家庭から川を守り、自然を守るということを実行に移しています。

写真2は「多摩の素顔」という写真コンテストで上位入賞した作品です。羽村堰で親子連れが思い思いに川を楽しんでませんか。

生き生きと緑の中を清らかに流れ続ける多摩川を願いながら、元気に写真を撮り続けたいと思っています。



瀬に遊ぶ（羽村堰にて）



## 多摩ルネサンス2000に参加して

多摩地域の産、学、官、市民が一堂に会して、毎年時代に則応した重要なテーマを取り上げ多摩ルネサンス協会主催（当財団協賛）のシンポジウムが行われており、2000年度は平成12年12月9日（土）に「21世紀をひらく教育」をメインテーマとして一橋大学で開催された。

環境問題、情報通信革命への取り組み、社会、経済の構造変化への対応等、今後の重要な諸課題を解決していく上での教育のあり方を多角的に検討することを目的に実施された。

基調講演、特別講演並びにパネルディスカッションの中から「環境問題と教育」についての概要を紹介します。

基調講演「これからの日本の教育を考える」

オムロン会長、日本経営者団体連盟副会長 立石信雄

教育機関の改革課題は企業が抱えている(1)グローバル化、(2)IT革命、(3)産業構造転換、(4)少子高齢化の進展の4つのメガトレンドを企業に先行し、時代を先取りして推進することであろう。日本の教育機関は小学校から大学を卒業するまでの15年間、人生の最も感動に満ちた時間をあまりにも社会から隔絶された学校という閉鎖社会にあり、視野のせまい人間同士だけで自己中心的人間の形成や、社会的義務から逃れようとするモラトリアム人間を育てる結果につながっているのではないか。これからは「人と違う何か」をもった「個性豊かな」「創造性」ある人材が求められる。市民一人一人が高い知性と世界観、洞察力をもって自らの価値観、生き方を追求する地球市民となるよう教育は市民社会づくりに貢献していくべきであろう。

特別講演「IT革命と教育」

読売新聞社編集局 解説部専任次長 島田範正

情報通信革命の時代に移行しつつあるのは明らかであるにもかかわらず日本の教育は時代にふさわしい変容を遂げていない。

現在の日本の子供の論理的思考力は弱いといわれている。これから求められる重要な資質は「想像力、企画力、判断力、分析力、創造性」であり、

自ら学ぶ姿勢を身につけることこそが、時代に生きる力の源泉になる。こうした能力を高め生涯持ち続けるための最強の学習ツールがITでありIT教育は極めて重要である。

パネルディスカッション「環境問題と教育」

小山 昇、小倉紀雄 東京農工大学両教授の司会でパネリスト下記3氏の講演とパネル討論が行われた。

「小中学校の環境教育」

埼玉大学教育学部 助教授 阿部 治

教科や学校の枠をこえて児童、生徒を取りまくあらゆる環境を総合的に扱う総合的学習は閉鎖的な学校教育を根底から変える可能性を秘めている。総合的な学習によって「学校を核とした持続可能な地域づくり」に収斂させていくことができる。その際の主人公は児童、生徒である。

「環境問題NGOと教育」

環境教育情報センター 森 良

これからの教育の中心的目的は子どもや市民の自己決定力を育てることである。そのための方法が参加型学習である。「学ぶことによって新しい人間の生き方や社会をつくっていく」学習であり、自発性を育み、社会参加の方法を学ぶプロセスである。社会参加によって地域の課題に取り組むことが、地球規模の課題に取り組むことにつながり発展していく。

「身近な環境測定方法」

身近な川の一斉調査実行委員会 代表 倉 宗司

1989年に「小金井の環境を良くする連絡会」が環境団体や個人に呼びかけて始めた一斉調査は10年後の1998年には96河川、湧水等555地点の調査に発展した。10年間の調査の結果、多摩川水系では下水道普及率が高くなるにつれ水質は改善されているが、都市河川の宿命なのか水源確保がむずかしい。枯渇する河川も見受けられ、質から量の課題へと移行している。

一斉調査は環境教育、生涯学習の中に位置づけられ、行政の枠を越えた「川は一本」という考え方が定着してきた。

## 水郷水都全国会議東京大会に参加して

今年で16回になる水郷水都全国会議が2000年11月10日から12日まで東京の隅田川を舞台に行われた。東京地区で行われるのは1993年に第9回を多摩地域で開催してから7年ぶりのことである。

日本全国から、地域の川、湖、海など水辺の環境を保全する活動に意欲的に取り組んでいる市民団体、行政、企業などの代表者が一堂に集まり、活動を報告し、ゆるやかな連帯の輪を広げようという試みである。

11月10日(金)

前夜祭は夕刻から東京の代表的な川の一つである隅田川に屋形船を浮かべ、遠路の客を迎える催しから始まった。

ゆりかもめが屋形船の灯りの中を舞い飛び交い遠来の客を歓迎するように思われた。

11月11日(土)

大会初日は、午前は隅田川流域を八つのコースに分かれての見学会が行われた。隅田川、神田川、不忍池、日本橋川、石神井川、東京港などをそれぞれ斑をつくり、地元の実行委員による綿密、丁寧なガイドにより行われた。午後はすみだりパークサイドホールにおいて全体会を市民、行政、大学、政界の7人からなるパネラーによるパネルディスカッションで行った。

テーマは「創ろう活かそう！私たちの川とまち」、副題としては「川を中心とした豊かな出会いのあるまちをめざして」ということで21世紀を迎えての水都や水都の望ましい姿について、活発に論議がかわされた。

夕方になると、交流会が行われ、全国各地から

の参加者から多くのメッセージが述べられ、水環境への熱い思いが会場全体を包み込んだ。

11月12日(日)

第2日は、六つの分科会に分かれ、それぞれ次のようなテーマをキーワードにして、全国から参加した発表者による活動報告があり、議論の交換があった。

- A1 安らぎや、賑わいのある快適な川のまち
- A2 歴史や文化を継承する水辺のあるまち
- B3 水の循環を大切に考え創るまち
- B4 開発と保全が融合した国土
- B5 子供たちが水辺で遊び育むまち
- B6 交流ネットワークを活かす水情報発信のまち

午後からは全体会として、記念講演が行われ、鳩山 邦夫氏(衆議院議員・元文部大臣)が「自然と共生」、竹内 誠(江戸東京博物館館長)が「江戸の文化」という演題で、それぞれ講演をおこなった。

隅田川合唱団による合唱組曲「すみだわ」の演奏があり、最後に「東京大会宣言」が発表され、都市河川の治水、利水、親水をバランスよく実現するために、市民・行政・事業者が協働し、パートナーシップを高める必要があることが強調された。

芳村 重徳

・発行日 平成13年3月1日  
 ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
 〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14  
 (渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://www.246.ne.jp/~tokyuenv/>

\*印刷所 雄文社 〒336-0001 浦和市常盤9-11-1 TEL (048)831-8125

